報告　カンニングの科学

前田 美子

マイケル・ファラデー著「ロウソクの科学」は、2019年にノーベル化学賞を受賞した吉野彰氏が「化学に興味を持つきっかけになった」と言及したことで、日本で俄かに脚光を浴びた古典的著作である。この本では、誰もが知っている一本のロウソクがみせる現象を、科学のさまざまな知識を用いて解説している。身近なコトも、科学のレンズを用いると、多角的な見方ができるという面白さを伝えている。

ファラデーに倣って、私が科学のレンズを通してお見せしたい身近なコトは、「カンニング」である。カンニングは、大学入試や国家試験で発覚するとセンセーショナルにメディアで取り上げられることもある。しかし、校内の定期考査や小テストも含めると、カンニング行為をしたり見たりしたという人は多い。実際、ある研究会に参加していた大学教員・大学院生約 40 名に、「学校の試験・テストで一度でもカンニングをしたことがある人は手を挙げてください」と言うと、およそ半数が挙手した。ある人はいたずらっぽく笑いながら、ある人は周りが挙手するのを確かめてから。カンニングは、古今東西、程度の差はあれ、多くの人にとって身近なコトである。

カンニングという事象を科学的に解明する試みは、北米を中心に 1960 年ごろから盛んに行われるようになった。世界的に近代的教育の大衆化がすすみ、競争的筆記試験が人の能力や知識を測る手段として広く受け入れられてきた頃である。カンニング研究のパイオニアは、教育学と心理学の専門家であった。彼らは、カンニング行為を教育活動から生じる負の産物で、防止しなければならない問題とみなした。学習者個人の特性・行動及び個人を取り巻く学校や組織の影響に関心が向けられた。これにより、一般に、個人の年齢・性格・成績や学校の罰則よりも、同級生のカンニングに対する寛容度が、不正行為を行うかどうかの判断に影響を与えることが明らかになってきた。

次第に、個人や学校を取り巻くより大きな社会的背景－政治、経済、文化、歴史など－に着目する研究者が現れた。法学者や哲学者は、カンニングは倫理的・道徳的な問題として扱うべきか、あるいは刑罰の対象となる問題なのか、という議論を繰り広げている。歴史学者は、6 世紀に始まった世界初の全国統一試験とされる中国の官吏登用試験に、すでにカンニングが横行していたことを突き止めた。これによると、受験者の所持品は饅頭の中まで検査され、カンニングが発覚した場合、受験者は厳しい処罰を受けたという。文化人類学の視点からは、集団主義の傾向が強い文化では、仲間につられてカンニングする学生が増えることがわかってきた。

経済学者は、カンニング行為・防止策の費用対効果や、カンニングの家計負担、カンニング産業の規模について研究を行っている。政治学の視点からは、全国統一試験におけるカンニング行為は、抑圧された市民の国家権力への抗議運動であると解釈された。この解釈によると、試験会場に警察や軍隊を動員したり、試験実施時間中に全土でインターネット接続を遮断したりすることは、この抗議を抑え込む手段となる。

最近では、工学分野の専門家たちが、カンニングの道具の開発に関心を示す。受験生の眼鏡・コンタクトレンズや筆記用具に仕組まれたハイテク通信機器や、それを取り締まる探知機の進化は目覚ましいものがある。ドローンや人工知能を活用して受験生の不審な動きをとらえる技術の開発も進む。

脳科学や薬学の研究者は、注意欠如・多動症やアルツハイマー病に用いられる認知機能を向上させる薬がカンニングの道具になると警鐘を鳴らす。いずれ、スポーツ選手のように受験前のドーピング検査が必要になる時代が来るかもしれないという。

こうして、さまざまな学問領域から研究が行われる中、カンニング研究の長老ともいえる教育学から、新たな学説が唱えられた。これまで、カンニングを悪しき行為とみなしてきたことから一転し、カンニングこそ、世界的に提唱されている「21 世紀型スキル」を身につける最良の機会であるという。21 世紀型スキルとは、これからの社会を生き抜くために必要となる資質・能力で、情報リテラシー、問題解決力、コミュニケーション力、コラボレーション力、創造力などを指し、従来の知識偏重型の学校教育では獲得するのが難しいとされる。カンニングはこれらの能力・資質を総動員してこそ成功するという。

さて、ここまで科学のレンズを通してみえるカンニングという事象－カンニングの科学－について紹介してきた。しかし、いつか誰かに「これがカンニングに関心を持つきっかけになった」と言われるのは、ちょっと厄介な気がする。

研究会開催報告

公開研究会

第 3 回　2019 年 11 月 27 日（水）17 時 00 分～18 時 30 分　会議室 1
「Fake News & Elections in Asia」

第 4 回　2019 年 12 月 2 日（月）18 時 20 分～19 時 50 分　会議室 1
「教育による平和構築―大虐殺後のルワンダで平和学教員として取り組んできたこと」
出席者　計 40 名（教員 3 名・一般 7 名・学部生 29 名・大学院 1 名）

第 5 回　2019 年 12 月 4 日（月）17 時 00 分～18 時 30 分　会議室
「Framing the War on Terror: A Study of Peace and Security in Okinawa as a Launchpad to the Middle East」

プロジェクト 2 研究会

2019 年 11 月 30 日　「日本音声学会　第 340 回研究例会」
主催：日本音声学会　後援：大阪女学院大学国際共生研究所

第13 回　2020 年 5 月 24 日　「Back to School 2020」
共催：The Japan Association for Language Teaching（JALT: 全国語学教育学会）

プロジェクト 3 研究会

第20 回　2019 年 10 月　9 日（水）「各学問領域と「ファシリテーション」研究・実践の相関関係について」

第21 回　2019 年 11 月 20 日（水）「ファシリテーション」のタイプ図による、大阪女学院大学／短期大学における授業の方向性・コンセプトのあり方について

第22 回　2020 年　1 月 15 日（水）「ファシリテーション」のタイプ図による、大阪女学院大学／短期大学における授業の方向性・コンセプトのあり方について

第23 回　日時：2020 年7月 15 日　（研究会）
講師：柳　博美　（公益社団法人）青年海外協力協会近畿支部・開発教育支援事業担当
ファシリテーター：前田　美子　大阪女学院大学教授
タイトル：JOCA’s support to development education（青年海外協力協会の開発教育支援）